講演3

「きれい」と「きれいじゃない」の人類学

酒井　朋子（人文科学研究所 准教授）

ご紹介いただき、ありがとうございました。では発表を始めさせていただきます。

人文科学研究所の酒井朋子です。私の発表のタイトルは「『きれい』と『きれいじゃない』の人類学」です。タイトルにもありますように、私の専門は人類学という学問分野です。この人類学という学問は、高校の教科にもありませんし、あまりなじみがないと思いますので、最初に少し説明をしたいと思います。

人類学というのは、人間とは何かというものを問う分野です。こう言うととても大きな問いですし、例えば哲学のようなほかの分野にも共通しているかもしれませんが、この問いを研究するにあたって、人類学ならではの特徴がいくつかあります。

人類学には、伝統的に、大きく分けると自然人類学と、文化・社会人類学があります。自然人類学は、生態人類学と言われることもあるように、生態学、それから進化生物学などの分野と結構重なっていて、例えば類人猿の生態であったり、人間の進化の過程などを研究しています。

もう一方の文化・社会人類学なんですけれども、これは、文化人類学と言われたり、社会人類学と言われたり、両方がかぶったり、重なったり、同じ人が両方やっていたりするんですが、世界のいろいろな地域の人間集団の文化や社会制度などを研究しています。

私は文化・社会人類学者なんですけれども、実は最近、自然人類学と後者の文化・社会人類学の 2 つの区切りがかなり曖昧になってきて、重なってきているんですね。これについては後で説明したいと思います。

文化・社会人類学の特徴は、学問的な専門家ではない一般の人たちの日常生活を探求することを通じて、人間とは何かという問いにアプローチしようとしていることだと思うんです。例えば、有名な哲学者の文献を読んだり、そうでなかったら、名の知れた芸術家の作品を分析したりするのではなく、そのへんのどこにでもいる一般の庶民の人たち、私たちや、ここにいらっしゃる皆さんも含むような、そうい

う人たちの毎日の経験とか習慣、人間関係を深く掘り下げて調べることを通じて、人間について考えていこうとしています。

大抵、人類学者は、自分で独自の観点から調査を行います。数カ月から数年間、あるいは毎月のように通うとか、1つの箇所、あるいは数カ所に長期にわたって滞在して、通って、一緒に暮らしたりして話を聞いたり、お祭りやイベントみたいなものに参加させてもらったりして、少しずつ観察をしたりします。

権威のある人や、突出した才能で知られている人ではなく、ごく普通の一般の人たちを見ることで、学問として一体何がわかってくるんだろうと、もしかしたら疑問に思うかもしれません。けれども、おそらくこれは、学問の目指す先、学問とか研究というものが一体どこに行こうとしているかというものの多様性に関わってくるのかなと思っています。

多くの研究や科学は、新しい事実を発見するとか、未知の技術を応用して社会に革新をもたらす、といったことを目指していると思いますし、それが研究というもの全般の根幹にある姿勢だと思うんですね。ただ、それだけではなくて、既に誰しもが無意識に実践していて、よく知っているはずの事柄を徹底して深く掘り下げていくこと、あるいは新しい方向から光を当ててみることで、いわば暮らしの足元に新しい光を当てることで、私たちが普段送っている生き方や、生活や、慣習というものが全然違ったように見えてくることがある。既に知っていたはずのことに、新しい可能性が見いだされることがある。

そういう研究も、あるのではないかと思います。人類学は、たぶんそういう分野なんだろうと思います。

私の研究テーマは、非常に大きく言うと、脅威と日常、あるいは暴力と日常というようなものになります。もう少し具体的には、紛争や戦争の経験とか、環境汚染とか、そういう中で一体日常生活がどうやって送られてきたのかを調べています。普通は戦争、紛争、公害というものは、日常生活を破壊していくものだと思われていますし、実際そうなんですが、その中でも、多くの人は何とかして日常を取り戻そうとして模索を続けます。繰り返しのような、ルーティンのような、面白みもないはずの、つまらないはずの日常がどうして取り戻されなければならないのか、ということを研究しようとしてきています。

そこから派生した研究が、汚れとけがれの文化史と人類学で、今日はこちらについてお話をします。

少しバックグラウンドをお話しますと、私は小さいころからフォークロアに強い関心がありました。フォークロアというのは、例えば民話とか、庶民の生活習慣みたいなものです。長く受け継がれてきたような、伝統とか言われたりすることもあるようなものです。

ここに示しているのは、初めて親にねだって買ってもらった本で、確か幼稚園ぐらいのときに、どうしてもこの本が欲しくなったんですね。たぶんどこの小学校にも、本屋でもまだ売っている本だと思うんですけども、シリーズ1、2、3があるんですけど、なぜか3号を買ってもらった記憶があります。

寺村 輝夫/おばけのはなし3/あかね書房

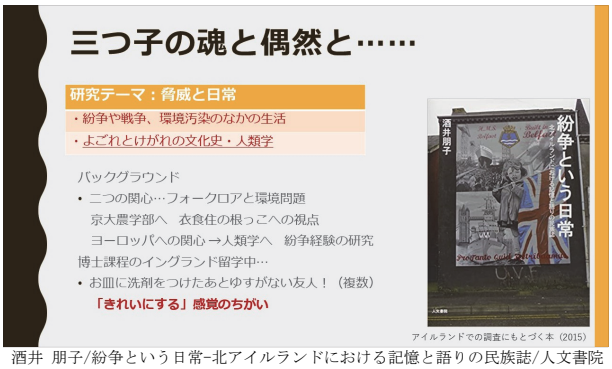
もう少し大きくなってくると、趣味がおどろおどろしくなりまして、これが、小学校の図書館から幾度となく借りた本になります。シリーズ本で、世界の怖い話、恐ろしい話、残酷な話、幽霊な話というものがありまして、私はそのシリーズをひたすら借り続けていました。同シリーズの中に、世界の笑い話、日本の笑い話、世界の頓知話、日本の頓知話もあったはずなんですけど、そちらは趣味ではなかったのかそんなに借りずに、ひたすら怖い話、残酷な話、恐ろしい話、幽霊の話を借りていました。

山主 敏子 編著/世界のこわい話/偕成社

このフォークロアへの関心とはまた別に、私の前の 2 つのご発表の中で環境問題と多様性の話があったと思うんですけども、私は、まさに地球規模の環境問題が話題となり、小学校・中学校時代にお茶の間のニュースとして流され始めた最初の世代に当たるのだと思うのです。その影響を受けまして、北海道の出身なんですけれども、京大農学部に進むことにしました。今もだと思いますけど、当時の京大農学部は環境をキーワードにしていたんです。そこに入ってみて分かったのは、農学は、作物、米の育て方、家畜の世話の仕方などを研究するだけのところではなくて、誰しもの生活を成り立たせているような衣・食・住、つまり食べる、服を着る、そして住むという暮らしの根っこのところを考えようとする、そういう広がりを持っている分野だということでした。

京大の農学部には、歴史、社会、文化を研究する専攻がありまして、そこで人類学に出合いました。先ほど世界の怖い話を見せましたが、ヨーロッパ文化への関心がすごく強くあったのです。それで、アイルランドを研究してみようと思いました。アイルランドという場所は、ヨーロッパの辺境として知られています。キリスト教化されてキリスト教がメインの宗教なんですが、土着のアニミズム、つまり山にも、川にも、動物たちにも、全てに魂があると考えるような土着の宗教とキリスト教が融合したような文化の場所で、今も、魔物や妖精の伝説の残る土地としてよく知られています。そこについて研究してみようと思いました。

ちなみに、先ほどラッコとオットセイのすごく面白いご講演がありましたが、アイルランドには、アザラシと漁師の恋愛話および二人の血をひく子どもの話が民話として伝わっています。その一方で、アイルランドは、30 年間ぐらい紛争を経験した所でもありました。私が研究したのはこの紛争です。政治学ではなくて、紛争を日常として生きる一般の人々の証言を集めて、それを考察した本（『紛争という日常』）を出したこともあります。



酒井 朋子/紛争という日常-北アイルランドにおける記憶と語りの民族誌/人文書院

このアイルランドの紛争経験の研究をするために、私はイングランドに博士課程で留学しました。そのときに、おそらく今日お話しする、「『きれい』と『きれいじゃない』の人類学」のテーマに関わる出合いがあったように思います。というのは、イングランドでは、院生も学部生もシェアハウスをするんですけれども、そこでルームメイトになった人たちの食器の洗い方がすごく気になったわけです。食べた後のお皿があって、スポンジで泡立てるなり、洗剤を溶かした水に漬

けるなりして、洗剤は付ける。そこまではいい。そのままゆすがないで、水切り籠に入れるんですね。そのまま乾燥させる。全員がそうだというわけじゃないんですけど、そういう人が結構多いんですね。何人かいた。その乾いた食器を使ってお湯を飲んだりすると、洗剤独特の臭いがするわけですけれども、そういうのはあまり気にならないんですね。洗剤の香料は、ある種のきれいさの証しであって、汚さを感じさせる、まだきれいになっていないと思われるものでは、必ずしもないわけです。その「きれいさ」の実感の違いです。そういうふうに、きれいにするために毎日の生活の中で一体何をするのかという行動が、割と違うんだなと感じるところがありました。

そこで今回のテーマに入っていくのですけれども、今日、お話するのは美しさのきれいではありません。清潔さの方ですね。

日本語は、「清潔さ」と「美しさ」の両方を同じ「きれい」という言葉で表します。英語だと基本的に clean と beautiful に分けられているのですが、清潔さと美の領域はちょっとかぶっていたりもする。でも、今日は清潔さのほうに焦点を当ててお話をしていきます。

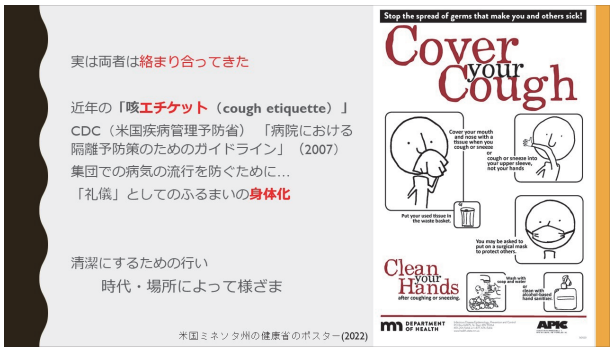
私たちが日々、きれいにするために何をやっていることといえば、手洗い、入浴、洗濯、皿洗い、掃除など、いろいろあるかと思います。それは一体何のためにやっているんだろうと考えますと、大きく分けて 2 つの理由が考えられます。1 つが、病気の予防。手洗いは本当にそうだと思います。実際にちゃんと行う人は、以前はあまりいなかったかもしれないですけども、新型コロナウイルス流行で、ここ数年で激増したと思います。

ただ、入浴、皿洗い、掃除を病気の予防のためにやっているかというと、微妙だなと思ったりもします。確かに掃除を極端にしないと、埃がたまってアレルギーなどを誘発するかもしれない。でも、それはかなり極端な事例であって、そういうところから要請される頻度よりも、しょっちゅう私たちはこういうことをやっているわけです。

たぶん、2 番目の「きちんとする」という目的のほうが重要だと思うんですが、「きちんとする」というのはものすごく曖昧な概念です。もうちょっと細かく見ていくと、ほかの人への気配りがあると思うのです。不快感を与えたくない、ということです。その不快感、気分を悪くさせないということは、つまり、きれいにする、入浴、掃除などは、爽快感をもたらすと思うのです。他人だけでなく、自分自身もすっきりする、あるいは、ちょっと元気になるということです。とても重要なところなんですけれど、周囲を気にしての「きれい」「きちんと」が確かにあるし、私たちはそういうものを意識しているのですけれども、それと重なるけれども、完全に一致しないような、自分なりのこだわりの「きれいさ」とか「秩序」があって、自分で何かものを考えたり、感じたり、行動するための気力・体力は、自分なりのこだわりの「きれいさ」や「秩序」から生まれてくるように思うのです。

先ほど言った病気の予防と、「きちんとする」は、歴史的に見ても両者はずっと絡まり合ってきているのです。「きちんとする」はすごく曖昧なんだけれど、それが社会における病気の感染予防

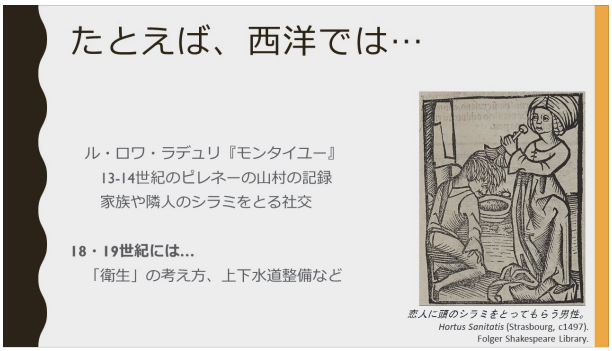
でとても重要だった。例えば、近年の言葉で「咳エチケット」があります。これは、2000 年代に新型インフルエンザがはやったときに、アメリカの疾病管理予防省が、「病院における隔離予防策のためのガイドライン」を発表して、そこでも使われている言葉だったりします。



つまり、病気の予防と言っているだけでは不十分で、礼儀作法として、考えなくても体が動くように人々にたたき込まないと、病気の予防にはつながらないんだと信じられているということです。こういうものを身体化と言います。つまり、危ないかなとか、病気がうつるかなと頭で考えるより前に、咳が出そうとなったら体が自然に動くように習慣づけるようなことです。

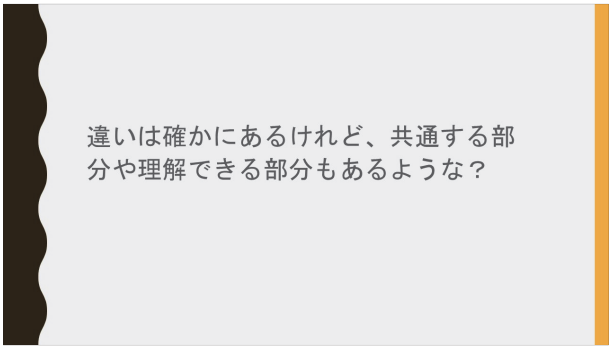
いずれにしても、「清潔にする」「きれいにする」ための行いは、時代や場所によってさまざまだったことも、いろいろ調べると見えてきます。例えば西洋では、古代には健康療法として入浴が推奨されていました。歴史で最初の医学者と呼ばれるヒッポクラテスも、体を温めることはとても健康にいいのでやりましょう、と言っています。ローマ帝国下では、浴場は社交の場だったりしました。古代ローマ時代にはたくさんの巨大浴場が作られるのですが、その後、キリスト教が普及したときに、入浴習慣はむしろなくなっていくことになります。キリスト教は、魂の美徳を重視して、身体をケアし過ぎることは魂の堕落につながると考えました。精神を高貴に保つために、ケアし過ぎるのは良くないというわけです。それで、入浴習慣はほとんど忘れ去られたんですが、その後、十字軍があって、イスラム圏への遠征があったときに、入浴習慣を現地で知った軍人たちがヨーロッパに入浴習慣を持って帰って、これは気持ちいいということで一旦ブームになるんですけれど、近世、14 から 15 世紀、16 世紀ごろにペストが大きな問題になると、入浴は危険だからやめなさい、ということになります。

これは、肌がふやけて体が温まると毛穴が開くので、そこから悪い病気の原因になるあの悪い瘴気が入り込むから、体が弱い状態になってしまうのでやめなさいと言われたんです。貴族は、身体の清潔さのために何をしたのかというと、ひたすら下着を替えまくっていました。1 日 3 回とか、食事のためにとか、お茶のためにとか、ひたすら下着を替えるんですね。でも、入浴しないので虫が湧くわけです。そうすると、シラミを取ることが重要なコミュニケーションの道具になっていったりします。ル・ロワ・ラデュリというフランスの歴史家が『モンタイユー』という、13 から 14 世紀ぐらいのピレネー山脈の村の記録を見て歴史書を書いているのですけれども、そこでは、家族やご近所さん同士で、日なたぼっこをしながらシラミを取り合っておしゃ



べりをすることが、人間関係を作ったり、地域の情報収集をするためのとても重要な時間だったことが記録されています。18、19 世紀になると、衛生という考え方が出てきて、上下水道も整備されて、現代に住む私たちの感覚に近い清潔感が生まれていくようになります。

こうして見ていきますと、違いは確かにあるんですけど、共通する部分や、理解できる部分もあるような気がします。例えば、入浴すると肌がふやけて毛穴が開き体が温まる、みたいなことは、体の実感としては今の私たちも持っています。現在はそれは、より健康になるという文脈で語られると思うのです。それが近世には、体に悪影響を及ぼすと解釈されていたわけですけれども、もともとある体の実感には、結構通じるところがあると思います。



「きれい」「きれいじゃない」の感覚は、違いとともに共通性もあるのですけれども、ここでちょっと考えてみたいのです。2 枚の写真をお見せします。両方、見目麗しくない写真をお見せしていて申し訳ないんですけれども、どちらを、「うわ、嫌だな」と思うかを考えていただきたいのです。これは、泥だらけの靴です。こっちのほうが「うわ、駄目だ、汚い」と思う方はどのぐらいいらっしゃいますか。ちょっと聞いてみたいので。ありがとうございます。では、こちらの食べ残しがこびりついたお皿のほうが、「うわ、ちょっと無理だなと」いう方は。ありがとうございます。これは、どちらがより汚いと感じるべきという問題ではなくて、人によって違いがあって当然だと思います。私は、個人的にはお皿のほうが「うわっ」と、写真を見た瞬間に反応として思うのですけれども。ありがとうございます。

ただ、もうちょっと詳しい状況を与えられたら一体どうなのか、考えてみたいと思います。例えば、お友達の家に行って、「靴箱の中に防水スプレーが入っているから出してくれない？」と頼まれて、靴箱の扉を開けたら、泥だらけの靴が入っていた。あるいは、お友達の家のキッチンに入っていったら、ダイニングテーブルの上に泥だらけの靴が置かれていた。この 2 つの状況を比べたときに、どっちのほうが「うわっ」と思うかです。

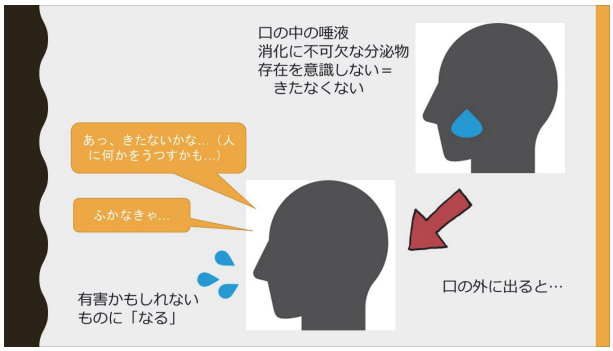
同じように、お皿のことを考える。お友達に頼まれて、靴箱を開けた瞬間に、食べ残しのこびりついたお皿が靴箱の中に入っていたときと、キッチンのダイニングテーブルの上に汚れた皿が置かれていたときに、どっちが「うわっ」と驚

き、忌避感を覚えるかを考えると、靴箱の中に汚れた食器が置かれているときのほうだと思うのです。おそらく、それは恐怖に近い、もしかして異常なことが起きているのではないかという感覚に近いものになると思います。

こういう忌避感は、病気の予防に関するものでは、必ずしもないと思うのです。例えば、食卓の上に靴が置いてあったとして、テーブルに土が飛び散って食べ物に付くのはちょっと嫌かもしれないですけれど、口に入ったからと言って、多くの場合健康上どうということはないわけです。

メアリ　ダグラス/汚穢と禁忌/筑摩書房

では、どうして場合によって「無理だ」と思うものに違いが出るのか。これについて考えた一人に、メアリ・ダグラスというイギリスの人類学者がおります。この人が言ったのは、あるものは、いつでもどこでも常に汚いわけではなくて、けがれ、汚れというのは、あるべきでないところにあるものだ、ということでした。秩序を乱すもの、ということです。曖昧なものとか、分類や境界をはみ出たもの、あるいは、まだルールが定まっていないものが、危険な（有害かもしれない）ものだと見なされる。有害かもしれないので、念のために隔離する。念のために隔離して、片付けたり浄化消毒しようとしたりするということです。

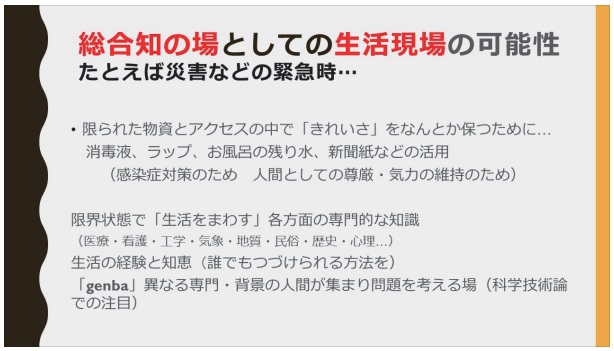


例えば、体液とか体からの分泌物で考えると分かりやすいのです。体毛、髪の毛、そういうものも含むのですけれど、取りあえず唾液を例に取ってみると、唾液は私たちの消化、つまり生命活動に不可欠な分泌物です。つまり大事なもので、なくては生きていけないものです。普段の生活のなかで、人としゃべっていて、唾液が口の中にあるうちには、その存在を意識しません。お話ししている相手の側にも、もちろん生きているので口の中に唾液があるわけですけれども、それを意識もしないし、その人のことを汚いと思うことも、もちろんありません。ところが、口の外に飛び出た瞬間に、あ、まずい、汚いかな、人に何かうつさないかなと思ったり、あ、拭かなきゃと思うようになる。もし、他人側からこうやってピョンと飛んできて、自分に付いたりすると、もっと危機感があるかもしれません。でも、よく考えてみると、他人の唾液も、危険な感染症にその人がかかっていない有菌者でなければ、本当は害はないはずです。でも、もしかすると害があるかもしれない。分からない。分からないので消毒の対象になるわけです。

そうする、「汚れ」とか「けがれ」の危険は、「有害かもしれない」という反面、「有害でないかもしれない」というのを裏に持っていることになります。それを、ひとまず集団の安全と秩序を保つために、有害のほうに仮定して対処するわけです。これによって、感染が集団の中に急激に広がる可能性を少なくすることができます。ただ、その集団にとっては

安全の方向に働いたとしても、そこで隔離・排除された個人にとってはどうなのかということです。「有害でないかもしれない」可能性を無視されて、閉じ込められたり、ほかの人との接触や行動の権利を奪われたりするわけで、それが一時的であれば、多くの人が、仕方ないよねと納得するかもしれません。つまり、7 日間の隔離期間とか、そういうものです。ただ、もしそれが 2、3 年など長期間にわたって続いたり、あるいは 10 年続いたりすると、個人の尊厳を著しく損なうことになっていくわけです。

そうすると、個人の尊厳と集団の安全・秩序は、けがれを巡って対立し得ることになると思います。ただ、先ほど少しお話ししたように、きれいにするという感覚は、集団を安定的に支えるための行いだけではなく、それぞれの個人が持っている誇りや気力と結び付いた「きれいさ」「こだわり」「秩序」があると思うのです。それは、例えば集団の公衆衛生の論理とか、外部の客観的な視点から見れば非合理と思えるかもしれないようなこだわりであるかもしれませんが、自分ならではの秩序に則している場合があります。たとえば、ごみ屋敷と呼ばれるものの住人が、実は本人にとってみればきちっとした秩序の中でものを集めていることは、ままあると言われたりしています。そういうものが、先ほど言ったように、何かにアクションを起こすとか、行動を起こすための、ものを考えたり感じたりするための気力の源泉になっている可能性があることを忘れてはならないと思います。



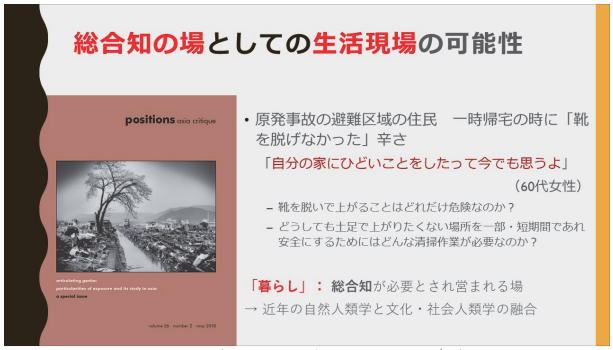
こうして見ていくと、私たちの普段の生活は全て生活現場と言えるものだと思うのですけれども、生活現場には、ある種の「総合知」の場としての可能性が出てきます。例えば災害などの緊急時ですが、限られた物資とアクセスの中でも何とかしてきれいさを保とうという努力が、避難所とか仮設住宅などのようなところで繰り広げられるわけです。手を洗う水がないときには消毒液を使う。これは感染症の蔓延を防ぐために分かりやすい事例だと思いますが、あるいは、汚れた食器を汚れたまま使うのではなくて、ラップを使い回すとか、お風呂の残り水を使ってトイレを流すとか、新聞紙を活用するとか、身近にあるもの、取りあえず手に入るものを何とかして使って、日常的なきれいさにできるだけ近づけようとしていくわけです。

これは本当に必要なの？と疑問に思うようなことも含めてです。例えば避難所の方々が久しぶりにお風呂に入れたときには、本当に元気になるわけです。皆さんが生き返ったようになる。そうすると、人間としての尊厳と気力の維持のために、何とかしてきれいさを保つことがとても重要なことが分かります。

こうしていくと、限界状態で生活を回すためには、各方面の専門的な知識をいろいろ動員してこなければいけないことになります。きれいさに関しては医療の知識、看護の知識がとくに重要だと思いますが、避難所の運営にあたっては、災害の後だと、工学、気象、地質なども重要になります。もちろん、民俗学、歴史、人間心理についての知見も重要になってきます。

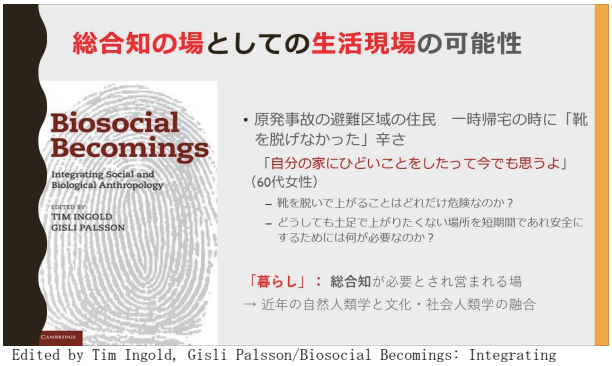
こういう専門的な知識に加えてとても重要なのが、生活の経験と知恵です。つまり、主婦の方が持っているような、長年蓄積してきた知恵ですね。身の回りにあるもので、持続可能なやり方で、無理のないやり方で日常を回していく。この経験が、誰でも続けられる方法を考案するに当たっては、とても重要になります。

今は、科学技術論の分野で、日本語の「現場」が注目されています。異なる専門や背景の人が集まって一緒に問題を考える場として可能性があるのではないか、と言われていたりします。この赤っぽい画像は学術雑誌の表紙なんですが、この写真の下に、「articulating *genba*（現場を突き詰める）」という特集タイトルが書かれています。私は福島県の原発の近くの市町村で調査をしているのですけれども、思い出すのが、そこの避難区域の住民の方が言っていた話です。一時帰宅のときに、何年も放置せざるを得なかった自分の家に入ってものを取ってくるわけですが、そのときに靴を脱ぐことができなかった。地震のあと何年も放置されていた家の中は、ものが散らばっていて危ないし、原発の近くなので放射性物質の恐れがあって土足で入らざるを得なかったわけです。防護服に全身を包んだ状態で、土足で家の中にあがる。それを、一時帰宅のときから何年たっても、まだ思い出すと言って、「自分の家にひどいことしちゃったと感じるんだ」と言っていた方がいました。



positions: asia critique Volume 26, Number 2, May 2018/Duke University Press

その人にとってつらい経験だったわけですね。これをどういうふうに考えるか。どうしても土足で上がりたくない場所が人間にはある。では、どうすることができるのだろうと考えたいわけです。靴を脱いで上がることが一体どれだけ実際に危険なのか、短期間であれ少しでも安全にするために、手に入る身近なもので、どういう清掃作業が必要で可能だったのだろう。たとえばそういうふうに考えることができます。さっき言ったようなさまざまな分野の専門知識と生活の実践知を総動員して、初めて有効な手立てを考えることができるようになるわけです。



Edited by Tim Ingold, Gisli Palsson/Biosocial Becomings: Integrating Social and Biological Anthropology/Cambridge University Press

私たちが普段経験している暮らしというのは、まさに総合知が必要とされ営まれる場で、その考え方が、最初に少しふれた最近の自然人類学と文化・社会人類学の融合につながっています。この本のタイトルも、Biosocial Becomings と書いていますけれど、人間のことは Bio つまり生物としての側面と Social つまり社会的側面を分けないで考えないといけませんという動きです。それにあたって、「きれい」「きたない」とか、「けがれ」の話、汚染のことは、とても重要なキー・イシューになってくるのではないかと考えています。皆さんの毎日の生活ルーティンの中にも、たくさんの不思議と謎が眠っているかもしれません。そういう視点から、ちょっとあらためて見てみるといいかと思います。

ご清聴ありがとうございました。